

「あそび」による地域の活性化

(CD「めいどいん栄町市場」制作による中心商業地の再生への曙光)

阪井暖子(琉球ブロック)

【ナニゴト?!】

人人人・・・ここ10年、さびしくなっていた街、栄町市場に恐ろしい程の人が、何かを期待して、目をギラギラとさせながら狭い通りにひしめき、電信柱によじのぼっている。テレビカメラが10台近くも場所とり合戦を繰り広げ、新聞記者も周りをかけまわっている。何がこのまちにおこったのか・・・。

それは平成18年3月18日(土)の午後のことでした。うりずんを前にした不安定な気候の沖縄、那覇。大雨もときおり降る、生憎の天気にも関わらずこのひしめいた異様な大衆は動く気配がないどころか、どんどん膨れ上がっていった。その彼らの視線の先にいたのは、「栄町市場おばあラッパーズ」ビートルズの I saw her standing there にのって彼女達が飛び出し、「栄町市場おばあラップ」を歌い始めると、この集団の興奮は最高潮に達し、狂喜といえる状況になりました。これだけの多くの人がひしめいているのをみたのは何年ぶりだろう・・・市場のおじいさんが涙を浮かべてつぶやきました。



【コトの発端】

ひょんなことでした。なんらかわりのない栄町市場の夜。居酒屋でのゆんたく。市場の毎日は、同じようでも毎日毎日小さな事件の連続。それは大きな家族のような濃密なコミュニティがひきおこす、笑えるけれども当人たちにとっては真剣なことがら。そんなおもしろい市場の日常を、個性ゆたかな市場のおばあがラップで歌ったらおもしろいのでは・・・。そんな話をはじめりだった。ウチナー口(沖縄ことば)はラップのリズムによくあう。またラップという音楽は平和を愛し、音楽でそれぞれの思いを競い合い、みんなの気持ちを高めていくという意味がある。おばあが

ラップで市場の日常を歌う。毎日かけあいをしているその内容そのままを歌う、これはおもしろい。

栄町市場にはミュージシャンが多い。1950年にできた古いまちぐわー(市場)なのだが、昔ながらの雰囲気そのまま残しているまちぐわーは、沖縄、那覇市でもごく少なくなってきた。そんなまちぐわーの雰囲気を愛する若者たちが新しくまちに入りお店をはじめていた。そういった若い人たちはミュージシャンが多く、またそのお店に来るお客さんにもミュージシャン、アーティストが多い。さらに、さすが沖縄の昔ながらの繁華街だけあって、芸達者な店主が多い。居酒屋の亭主も、八百屋さんも、歌をうたわせ躍らせれば一流、中には八重山民謡大会で優勝した経験のある歌姫がいたり、踊りで優勝をした人までいる。実は芸能の宝庫でもある。こういう環境のなかでまちぐわーならではの文化が生みだされてくるのでは、という思いがあった。こんな人たちが活躍できる場があったら、市場は自信をとりもどし、活性化のきっかけがつかめるのではと考えていた。

【ホントにやってしまった】

冗談のように話されていたこのことを、実はずっと「まちぐわー芝居小屋」をつくりたかった私は、しつこく根にもっていた。でもそんなことを実現できる予算もないし・・・と考えていたとき、那覇市役所から国土交通省の補助金の話が舞い込んできた。「地域資源活用構想策定支援調査」。固いタイトル。でも内容は使えそう。やりたい一心で、企画書を書いて出した。あまりにおかしな内容だったのか、企画が通ってしまったのだ。びっくりしながらありがたくやらせてもらうことにした。いかんせんこんなこと初めて。本人は1つあって音痴という音楽業界には触れたこともない人間が1からCDを作るということで、とても大変で多くの人に迷惑をかけながら、とにかくとにかく、つくった。

【やはり宝庫だった】

実行委員会をたちあげて、市場へのラブソングをつくって欲しい、と頼んだら若いミュージシャンは早速作曲にとりかかってくれた。また、いつも遊びにきている仲間というネットワークをつかってプロの人たちにも「栄町市場」をテーマにした歌を作詞作曲し歌ってもらった。CDジャケットも今売れっ子の紅型職人が栄町市場が好きだというそれだけで、またプロの写真家も市場育ちということでみんな、みんなボランティアで参加してくれた。

栄町市場という古いまち、そして濃密なキャラクターの濃い人たちがひしめいているこのまちぐわーはやはり凄い。

またこのまちぐわーというこの場所、空間が生み出す音楽や文化があるのだと、動き始めて改めて強く感じた。

そしてこのまちぐわー文化の象徴が、栄町市場おばぁラッパーズと、栄町オールスターズ。当初の企画の発端となったオバアラッパーズも八百屋の店主、南米料理屋のマスター、訪問看護の看護師、りさいくるショップの店主といった普段の顔からは想像もできないような人たちにわかに結成された（私に騙された、とみんな今でもいう）が、彼女達の隠された豊かな才能で、みごとに花開いた。また栄町オールスターズによる、ダウントウンダンスもある種の興奮のうちにもみるみるできあがっていった。凄い！凄い！みんな凄い！！企画者としては手をたいて驚くばかりだった。



【波及は思わぬ方向まで】

制作をはじめてしばらくしたら、このことを聞きつけた新聞社が取材にきたりしていたが、どうせ記念品みたいなものだろう、とか、ホントにそんなことできるの？といった斜に構えた感じであった。周囲の知人たちも同様の反応で、またバカなことをやっている・・・という冷ややかな眼が多かった。

企画者として、この調査の効果としては、栄町市場という一点に絞ら込んだCDができた、ということ、そしてそれを地域の人たちでつくったことによる結束力の強化、そしてこれが「もし」売れたらCD制作費は、補助金でまかなうことができているのでその販売利益はすべて市場の次の活動の資金に使える・・・といったものを期待していた。

しかし、CD発売前に市場でのライブを行い、それが大成功を収め、県内各テレビ、ラジオ、新聞がこぞと取りあげはじめると大きな変化がでてきた。そして実際にCDを完成し、県内の一般レコード店（TUTAYA、地元レコード店、県外のわしたショップ等々）で販売を開始すると、その売れ行きは思った以上のスピードで、販売開始からわずか3ヶ月で当初作成した1000枚の殆どを売り切る状況になっている。

またNHK等が全国ニュースで放送したこともあり、県外

からも強い反響がでてきている。県外の各テレビ局（TBSニュース23、NHK、日本テレビなど）ラジオ、雑誌等からも取材攻勢がかかり、おばぁラッパーズは一躍有名人となってしまった。

この勢いに実行委員会に参加していた若手ミュージシャンをはじめ、それ以外の市場の人たちもこのCDを活用していこうという動きが活発化し、桜坂劇場での3ヶ月めのお披露目ライブを敢行した。このライブも300人の劇場に450人を超す人を集め、チケット売り切れ、入場制限がかかる劇場始まって以来の事態となった。

ついで、市場の中で屋台市とライブを行ったり、CDの販売益を使った次の展開を模索し始めるなど大きなまちづくりへの動きがでてきている。

さらに、このCDという商品一つでできることで、このジャケットをつかったTシャツなどの関連商品ができることで、栄町市場ブランドの商品が生まれてきたり、さらに携帯等の着うたなど、コンテンツビジネスにまで波及しており、当初の想像を超えた効果がでてきている。



【汝の足元を深く掘れ】

ニーチェのことばに、「汝の足元を深くほれ、そこに必ず泉が湧き出るであろう」というのがある。今回、このCDをつくって、これを強く実感した。今あるものを新しい眼で、深く掘りなおしてみるとそこから湧き上がってくる宝物がある。そしてもう一つ、「まちにはあそびがやはり必要」。やはり楽しいことには人が自然と集まる。活性化活性化と眉にしわをよせて議論しては寄ってもこなかった若い人たちが、楽しいこと、遊びには一気に集まってきた。活性化とか、大義名分に関係なく、楽しくておもしろいことには人は集まってくる。そのあそびのしかけが必要なのだ、あらためて認識した。